

猿 橋
小 学 校

瑛 玖 良

瑛玖良校は明治期における猿橋小の旧名。切磋琢磨の意が込められている。

ネット依存は病気です

校長 瀬谷 一男

先月初め、連続住居侵入・暴行事件が発生し、学区内に緊張が走った。被疑者が検挙されるまでの間、不安な日々が続いたが、このたびも多く保護者・地域の皆様から子どもたちの登下校を見守っていただいたことは、大変心強かった。何よりも優先されるべきは子どもたちの安全。かけがえのない子どもたちの命を守り抜く決意を改めて強くした出来事だった。

以前、「ネトゲ廃人」について話題にした。オンラインゲームに没頭するあまり、ゲーム中心の生活から抜け出せず、現実の社会生活に戻れなくなった人などを指す言葉だ。これは、決して一部の特別な人たちの話ではない。「廃人」とまではいなくても、オンラインゲームにのめり込む大人や子どもは身近にも相当数おり、現状はかなり深刻と言えるのではないか。

昨年秋、厚生労働省は、「ネット依存傾向がある中高生がこの5年間で倍増し、全国で推計93万人に上る」との調査結果を発表した。実際にはもっと多いという専門家の指摘もあり、ネット依存の低年齢化が進んでいることは間違いない。

「ネット依存は病気です」5年前、新潟日報に掲載されたコラムである。筆者は、情報教育アドバイザーの遠藤美季さん。中には、スマートフォンに接続できない状況になると手が震えるという禁断症状が現れる中高生もおり、ここまでくると、ネット依存は、アルコールやギャンブルへの依存と変わらない、専門医による治療が必要な病気であると断言する。

また、常に使えるネット環境は、あらゆる時間を子どもたちから奪っている。遊び、学習、睡眠、運動、家族とのだんらん……。遠藤さんは「暇な時間」もその一つだと指摘する。暇な時間を潰すためにネットを使う子がいるが、実は、暇な時間や退屈な時間は、子どもが自分と向き合い、成長するために必要なもの。その時間を奪えば、自分の頭でものを考えない人間に育ってしまう可能性がある。ともすれば、「心の成長」がそこで止まってしまうことにもなりかねない、というのだ。

インターネットにより、私たちは快適な生活を手にした。しかし、そのことで失ったもの（あるいは、失いかけているもの）も大きいのではないか。ネットとの付き合い方を今一度見直し、まずは私たち大人が、子どもの範となる節度ある利用を心掛けたいものだ。少なくとも大人が、子どものネット依存を助長するようなことがあってはならない。これも子どもたちを守る大人の役目だ。

